

土曜日の夜。時刻は二十一時を過ぎた頃。

場所はとあるマンションの一室。私の恋人である、かおる薫の家だ。

今日は昼からお邪魔していて、このまま泊まらせてもらおう予定でいる。

私は料理上手な彼の手料理でお腹をいっぱい満たして、広くて清潔な浴室で全身をピカピカに磨いて。そうして今では、シツクなセミダブルのベッドへ仰向けに寝転んでいた。

しかしこの身につけているのは、ショーツ一枚のみ。

その上私は自分で自分の足を抱えて、大きく開脚していた。

浮いたお尻の下には、胡座を掻いた彼の足が差し込まれてもいる。そんな薫の格好は上半身のみが裸で、下はグレーのスラックスを着ていた。もちろん、トランクスもだ。

私だけ、パンイチなのだ。

おかげでただでさえ恥ずかしい格好が、まんぐり返しに近くなつてもっと恥ずかしいことになっている。

何度経験しても慣れない格好に私が照れていると、それを察した薫がにっこりと笑った。

柔和な雰囲気でおつとりと喋り、料理が得意でとにかく優しい。

そんな彼は収入が安定している上に有給の取得も容易なホワイト企業勤務だ。土日祝が休みである私と休日が重なり、殆んど毎週会えている。

余所見はせず誠実で、連絡はマメ。

更には記念日や誕生日を決して忘れず、いつもにこにこして一緒に過ごしてくれている。

今年の私の誕生日には、旅行にも連れて行ってくれた。

平日の夜に寂しくなつて連絡をすれば、会いに来てくれる度量すらある。

とにかく、とにかく素敵な恋人なのだ。

二十代後半に差し掛かった今ではそれとなく結婚したいという意思を示されていて、それもまた嬉しい。

そんな彼の欠点を挙げるとしたら——それは、性欲が強すぎるということだろうか。

「それじゃあ、今日はじーっくりクリちゃんいじめるねえ♡」

「……うん」

その上、恋人<sup>私</sup>の性感帯開発に並々ならぬ情熱を注いでいる。

付き合い始めた頃は私がエッチに不慣れなこともあって、遠慮してくれていたのだが——

それから一年が経った今では、隠す素振りを見せなくなった。

のらりくらりと躲していたが、とうとう逃れられなくなつて。  
やけに豪華な夕食を振る舞われた後である私は、今——太らされ  
た養豚が如く、その時を待っている。

「ん……っ！」

私が今唯一身に付けている衣服、パンツの上から。

薫は右手人差し指の腹を当て、クリトリスをふにりと押した。

「ふふ、まだクリちゃんおねんねしてるね♡」

「……っ」

可愛いようで、恥ずかしい表現だ。

私はたたでさえほんのりと熱かった顔に熱を集め、ぐっと押し黙  
った。そんな私の顔を見上げて、薫はにっこりと微笑む。

「起こしてあげなきゃ♡ねー？」

「っ、ふうっ♡」

優しく優しく、ほんの小さな力で指圧するように。

薫はまだ『起きて』いない芽を繊細な動きで刺激していく。

「まだ柔らかい♡いつもすぐに硬くなっちゃうから、新鮮だなあ♡」

「っはあ♡んん……っ」

ぷにぷに、ぷにぷに……♡

微かに指圧されるクリトリスへ、じわじわとした快感が蓄積していく。

下腹部が少しずつ熱く、重くなっていく感覚。体が『その気』になっ  
ているのだと——私は自分自身に、思い知らされる。

「クリちゃん起きて♡♡ほーら、おきてえ♡」

「ん、はあ……っ♡んっ♡あっ♡」

今度は下着の上から、指先でスリスリと。皮被りのクリトリスが撫でられて、敏感な芽に微かな刺激が届く。

包皮の内側には殆んど指の感触が届いていないのに。擦られている気になった淫芽が、ムクムクと育っていった。

「がんばれ♡がんばっておっき♡おっき♡」

「あ、あ、あっ♡あんん、んっ♡」

決して芯自体には刺激が届かないようにと。

最大限の注意を払いながら、薫の指がこちよこちよとそこを擦る。

「いーっぱい皮の上から、スリスリよしよししてあげるからね♡」

「んんっ♡ん、うっ♡あ、あっ♡」

下着越しであるからこそ、擦る動きはスムーズで。与えられる刺激はとても心地好いものだった。

しかし私のクリトリスは、指圧される悦びを忘れてはいない。

だから撫でられながらも押し潰された感覚を反芻し、もっと強くされたと妄想して——小さいながらもどんどんと怒張していく。

「ふふ、そろそろコリコリになったかな？ 確認したいけどお……もうちよつと擦っちゃおうかな♡」

「ふーっ♡んくっ♡ふうっ♡♡」

小さな快感が蓄積して、次第にジンジンと疼き出す芽に強い刺激を与えられないまま――

私はスリスリこしよこしよと下着の上からクリトリスの皮を搔かれて、文句も言えないまま身悶える。

「あ……っ！ ああ、う……っ♡」

「ふふ……♡きもちーね？」

爪で強めにカリツと搔かれて期待をすれば、また指の腹で優しく撫でられる。

スリスリ、スリスリ――♡ただただ優しく甘やかされる淫芽は、強い刺激をしつこいほどに思い返してはジンジンと疼いていた。

「優しく撫でてるだけでも、硬さが分かつちやうなあ♡もー、勃起しすぎだよー？」

「あ……っ！……うう♡」

またカリツ♡とひと搔きだけされてから、優しく撫でられる。

期待で熱くなったクリトリスは無情にも焦らされて、ビクビクと跳ねていた。

「クリちゃん、敏感で可愛いね♡お口でいっぱいペロペロちゅくちゅくしたいなあ♡」

「……っ♡……っ♡」

唇で吸って、舌でくりゅくりゅと弄くられて。揉みくちやのグチヤグチャにされるのを想像させられながらあくまでも優しく——私はそこを撫でられる。

「先週もさあ♡皮を剥いて、芽を直接ちゅーって吸ったらあ♡気



持ちいいよおって泣いて、ビクビク震えて……♡いっぱいイクイク、したもんねー？」

「……っ、うううっ♡」

つぶさに思い出せるようにと言葉を選んで、薫は私を煽る。

その効果はてきめん覲面で、私の体は耐え難い疼きを発し出した。

「あの時も、可愛かったなあ♡今日も同じようにいっぱい、イかせてあげるからねえ♡」

「はっ、あ、んっ♡んふ……っ♡お、お♡」

期待から震えるクリトリスを優しく優しく撫でられる。

かと思えばカリッ♡とまた一瞬だけ爪で搔かれて、ビクンと体が跳ねた。

「うううっ♡あうーっ♡」

どんなに優しい刺激だけを与えられていても。突き抜けるような

刺激が忘れられなくて――

つい腰を揺らしてクリトリスを押し付けようとする私の体を、薫は軽くいなす。

「もじもじちゃって、可愛いなあ♡」

「いじわるう……♡」

とぼける彼に不満をこぼせば、にっこりと笑いかけられた。

唇を尖らせて不服を表せば、親指でクリツ♡と強めに先端を擦られる。

「あ……!」

「んふっ、ビクンツてしたあ♡♡」

下着越しとは言え皮の下にある神経の塊を撫でられて。ヒクつく膣口からはゴプリと愛液が溢れ出した。

しかし蠢く隘路を尻目に、彼の指はまた、鈍い刺激のみを生み出

す。

「クリちゃん、ガチガチになったねえ♡感じやすくてかあわいい♡」  
「ううう…♡なら、もうっ♡」

相変わらず私は下着と包皮に守られた芽を、優しくスリスリと擦られていた。強い刺激は与えられずに、延々と焦らされているのだ。もっとと望みながら、遠い快感に身を炙られ続ける。

「っ、うう…っ♡ふう、ん…っ♡」

ほんの一瞬だけ与えられた強い快感が、忘れられない。早くももっとと気持ち着急いて、体が分かりやすい快感を渴望していた。

だからこそ私はゆさゆさと腰を揺らして、微かな性感に縋りつく。  
「もっとしてほしい？」

「あ、あっ♡うん…っ♡もっっ♡♡♡」

素直に頷いた私に、薫も頷き返した。

人差し指がクリトリスから離れて、今度は親指が押し当てられる。私が期待にぶるりと震え上がれば、彼はにっこりと微笑んだ。クリトリスに触れた親指が——ゆうっくりと芽を押し上げる。

「ふああ……♡あっ♡あんっ♡」

「気持ち良さそうだね♡ふふ、ふにつ、ふにつ♡」  
力としては全然まだ、弱いけれど。

クリトリスに、ほんのりと圧を加えられている。

まだ足りない。けれど微かにでも刺激が強まったのは確かだ。

「あ、あああ……♡んん、んう……♡」

——足りない。でも、下着と皮越しに弱く擦られるのとは、全然違う。

指の腹で優しくゆったりと指圧されて、気持ちがいい。

「あうっ♡……あっ、んう……♡」

気持ちがいい。確かに——さっきよりは気持ちがいいのだけれど。それでもやっぱり、刺激が弱い。やっぱり物足りない。

指圧されているとは言えほんのちよつと押されているだけだし、その間隔は長い。

「沢山気持ち良くなれて、よかったねー♡……ふふっ♡」

「っ、ううう……♡」

彼の親指はクリトリスをほんのちよつと押してはすぐに離れ、間を置いてからまたそこを、ほんのりと指圧する。

先ほどより気持ちが良いはずなのに、焦ればかりがどんどんと蓄積していく。

「僕、フル勃起クリちゃん大好きだなあ♡たくさんいじめたくなっちゃう♡」

「……っっ」

それなら今、たっぷりいじめてほしいと願っても。

与えられるのは緩慢で間延びした刺激だけだ。

しかも指先で押されている時間よりも、離れている時間の方が長い。もっと強くしてほしいと願ったタイミングで毎回指が離れていくものだから、フラストレーションばかりがたまっていく。

「ふふふ♡ガチガチクリちゃん、ツン……♡ツン……♡」

「はう……、んん……っ」

もっと速く。もっと強く。

刺激を与えられれば与えられるほど、渴望が強くなっていく。飢えが、乾きが、顕著になっていく。

「はあっ、はあっ、もっとお……♡」

「うん、ゆっくりね♡あとでいーっぱいゴリゴリぐちゅぐちゅして

あげるから♡」

親指でぺったんこになるほど強く潰されて、ゴリゴリと擦られる。指で皮ごと摘ままれて芯を扱かれ、めちゃくちゃのグチャグチャにされる。

その瞬間を想像しながら——私は優しく優しく、期待で震える芽を指圧される。

強い刺激など一欠片も与えられずに、期待で胎を灼かれるのだ。

「ふふ♡クリいじり、楽しいなあ♡」

「っ、はっ♡くうう……♡」

足りない足りない胸中で喚きながらも、私は必死に耐えていた。ベッドの上の薫はたまに、物凄く意地悪になる。

だからもし今、軽率にわがままを言えば——もっと酷い焦らしを食らうハメになる可能性があった。

「バツキバキでエッチなクリちゃん♡♡だーいすき♡」

「……ふっ、うんんっ♡♡」

皮の上から爪でカリカリされても、それは控えめで。やっぱり受け取る性感は少ない。感覚が遠い。

その上、言葉で煽られている。

胸中で響いていた足りないという叫びは次第に大きくなり——いけないと思いつつも、私の口から本音が溢れてしまう。

「もっと……♡もっと、強くうっ♡♡」

「……んふっ♡」

言ってからチラリと顔色を窺えば、整ったかんばせは恍惚と笑っていた。

どこかヤンデレチックな表情に腰が引ける。

けれど興奮しているだけなのだろうと考え直して、私は自分の足



をギュツと抱えた。

「このガチガチ勃起クリちゃんを——もっと強く、いじめてほしいの？ いじめられて連続でいきまくりたいの？」

「あ……っ、うん……♡そう、してほしいの……♡」

微かな刺激でも、続けられれば快感は蓄積していく。

今では限界まで膨張し、ビクビクと跳ねる弾力のある肉芽。その先端をクリクリと捏ねられながら、私はしつかりと頷いた。

彼の目を真っ直ぐと見つめ、期待にカタカタと体を震わせながら——欲望に忠実になって、頷いたのだ。

「……あっ♡ハッ♡ハッ♡はっ♡♡」

——少しずつ、指圧が強くなっている。

それに気付いた瞬間——私はまた、膣口から粘度の高い愛液を溢してしまった。

「ガチ勃起クリちゃん、硬いねえ♡」

「ンッ、くん……っ♡ふう、——おっ♡」

やがて下から指先でクニリと芯を持ち上げられて。

私の脳天には、鮮烈で強烈な衝撃が走った。

「すごい弾力う♡ぐいーって押しても、跳ね返ってくるよ？」

「おッ♡♡♡お、お……♡♡」

先ほどまでとは比べ物にならないほどの圧力。

強く押し潰されたクリトリスが、ビリビリドクドクしている。

「ほら、こうして思いっきり押しても……すごい抵抗してる♡僕の指を跳ね返してくるね♡」

「あッ！あぁあゝ……♡♡」

ぐりゅうつ♡と押し潰されたと思えば指を離されて、またしてもぐりゅうつ♡と捻り潰される。

望んでいた強い快感。――けれど焦らされていた時とのギャップが強すぎて。体も脳も、上手く受け止め切れずにいた。

「コリッ、コリッ♡ゴリゴリ♡いいこお♡いいこお♡」

「お、おおッ♡お、お……♡♡」

皮の先からちよこんと顔を出している先端が、下から掬い上げるようにして触れられている。

ぷつくりと腫れた芽は指の腹で押し潰される度私に、鮮烈な快感を与えていた。

「ふふふっ♡触り心地がいいから、ずーっと触ってられるね♡」

「おお、おっ♡♡きも、ちいっ♡♡♡」

指圧されては揺さぶられるているクリトリスが、たまらない。

お腹の奥が熱くて、たまらない。

芽がぐにゅりと押し潰される度に私は体を震わせて、頂きへの階

段を上っていった。

「ふ、お——ッ」

ダメ、と思った時にはもう、膣内がヒクついていた。  
達した直後の、あの感覚。

——ああ、イッてしまった。

そう悟りながら、私は尚も陰核をいじめられる。

「だめっ、イッ、たっ♡♡♡」

「うん、そうだねえ♡よかったねー？」

イッた直後だから刺激が強いと、そう伝えたかったのに——

言葉の続きを敢えて違う方向に想像した薫は、絶頂の余韻でジク  
ジクするクリトリスを指先で押し潰したまま揺さぶる。

「ひっ♡♡♡ひい……っ♡♡」

押し寄せる快感が強い。

逃げたいのに、腰が砕けてしまっている。

「何度でもイってね♡」

「……っ♡お、ふうっ♡♡」

グッ、グッ♡と押し潰されて、クリクリクリ♡と転がされる快樂の芽。お腹の奥が熱くて、ヒクヒクして——どうにもならない。

「今度は、スリスリくるくる♡」

「ヒッ♡♡あ、おお……ッ♡」

指圧を止めて、皮からはみ出した先端を擦られる。

下着越しに敏感な部分を刺激されて、砕けた腰がビクビクと跳ねていた。

「素直に気持ちよくなれるクリちゃん、よしよし♡いいこ♡♡」  
「あ、あっ！——だめっ♡」

あまりにも気持ちが良くて、駄目になってしまいそうだったから。

私はつい大きな声を出して、拒絶してしまった。

「ふふ、そっかあ♡だめなんだね……？♡」

「あ……？あ、ああ……♡」

鋭い快感を生む先端を撫でるのは止めてほしいと、そう願ったのは確かだ。

しかし本当に止められてしまうと、私の体はそれに不満を抱いた。

「んん、んゝ……♡」

薫はあっさりと先端を擦るのを止め、今はまた包皮の上からクリトリスを愛でている。

しかもまた、緩慢で優しい触れ方に戻っているのだ。

くるくる、くるくる――

一度達しても尚、硬度の落ちない陰核が――円を描くように優しく、隅々まで撫でられていく。

根本から側面まで満遍なく、弱い力加減のままスリスリと擦られるのだ。――ただし、敏感な先端だけを避けて。

「ふふ、ビクビク止まんないねえ♡またイきたいのかな？」

「はっ、はっ♡んんっ♡♡」

あくまで焦らず、ゆっくりと、丁寧に。しつこいほどにクリトリスが、愛でられている。

達した直後はもういらないとまで思っていた淫芽が、はね除けたはずの快感を今は欲していた。

「あはっ♡敏感クリちゃん、かわいい♡♡」

「んっ♡んっ♡ああ……っ、足りないっ♡」

ついさっき、駄目と行ったはずなのに。わがままな私は、掌を返したように主張を変えた。

焦らされている内にどうしようもなく疼き出した皮かむりの芽は、

微かな快感にジワジワと炙られ続けている。

下着と皮の上から撫でられながら、貪欲に快感を求めているのだ。

「う、ううう……っ♡」

どんなに欲して腰を突き出しても。与えられるのはどこまでも優しく、緩い刺激だけ。

こんなのでは物足りない。そう主張して、行動しているのに。

薫は優しく優しく、皮の上から芽を撫で続ける。

「ん……っ♡ギュッ、てしてえっ♡」

「だーめ♡優しくするの♡♡」

しっかりと摘まんで、指の腹で擦ってほしいのに。

それなのにやっぱり、彼がくれるのは微かな快感だけだ。

どんなに膣内が疼いて蜜を溢しているようが、お構い無し。

彼はとにかく、にこにここと笑いながら——クリトリスを微かな快



感で苛み続けた。

「よしよし♡クリちゃんもっとおっきくなーれ♡がんばれ♡」  
「あっ、はあっ♡ふうっ♡んあっ♡」

調子を変えず下着の上からゆったりと撫でられているだけなのに、  
どんどん快樂が膨れ上がっていく。

ガチガチの芯が皮を押し上げて。先ほどより先端が大きく顔を出  
しているのに、相変わらずそこには触れてもらえない。

「わあクリちゃんかったあい♡すごい勃起率♡イイコイイコ♡」  
「あ、ああ、あっ♡♡♡」

言葉で興奮を煽られても。触れ方は相変わらずのソフトタッチだ。  
スリスリなでなで。焦らしに焦らされている淫芽が、ビクビクと  
跳ねている。

「ドスケベに勃起できて、すごいねえ♡立派だあ♡よしよし♡」

「ふっ、んう……っ♡うう、あうう……っ♡」

どこまでもしつこく。優しく、甘やかすように。

細やかな力を加えられて撫でられているクリトリスが、期待でジンジンとしている。

腰を自ら揺らしても手を引かれるから、刺激は一向に強まらない。

「いっぱい気持ちいい声出せて、えらいね♡♡表情がトロンとして

……ふふ、かーわいい♡」

「ぐん、ふうっ♡んぐ……っ」

物足りないのに、気持ちが良い。

気持ちが良いのに——物足りない。

頭の中で二つの言葉がグルグルと回り、腰ばかりが淫らに揺れる。

ついには我慢が出来なくなって強めに腰を突き出したが、「わあ

♡」なんて言いながら躲かされてしまった。

「あっ、ほら見てえ？ パンツをこんなにも押し上げているよ♡」

「……えっ？ あ、やっ！」

撫でる動きを止めて、下を向くようにと声をかけられる。そうして私が思わず見てしまった場所にあったものは、下着を押し上げてポツリと主張している突起であった。

一部分だけが盛り上がっている自分の濡れた下着。それを指摘され、認識させられて。私は恥ずかしさにキュン♡と入り口を収縮させた。

「おちんちんでもないのに健気に勃起して、可愛いよね♡もつとスリスリいじめたくなっちゃうよ♡」

「あ、う……♡ハッ、ハッ♡んうう♡♡」

再び触れた指先が、薄布越しにするん♡と先端を撫でた。

期待にジンジンとしていた場所にやっとな触れてもらえて、痺れる

ような性感が走る。

「気持ちいいのかな？これ好きー？」

「あっ、あっ♡すきっ♡♡♡」

やっと触れて貰えた先端から、ビリビリとした刺激が生じている。人差し指の腹で下から掬うように持ち上げられて。私は背筋から腰までをゾクゾクと震わせ、待ちに待った刺激を享受していた。

「そっかぁ♡君はガチガチ勃起クリちゃんを、指でスリスリコロコロされるのが好きなんだねー♡」

「あ、おっ♡お、おお……っ♡♡♡」

私は何度も頷きながら、分かりやすい快感に体を沸き立たせる。クリトリスを刺激されればされるほどお腹の奥が熱くなって。ハフハフと呼吸を荒らげながら、与えられる快感に浸っていた。

「あはっ♡パンツの染みがどんどん広がっていくよ？もしかして

お尻までびしょびしょになってるいのかな？」

「あッ♡アッ、クリ、きもちいい♡♡♡♡」

先端をクルクルスリスリされながら、私は陶然とする。

もう、本当に。めちゃくちゃ、気持ちがいい。

欲を言えば押し潰してグリグリされて強制的にイカされたいが、充分気持ちいいのでこのままでも構わない。

ただ、止めないでほしい。このままイきたい。

「クリちんぽ、きもちいいね♡クリちんぽイイって言ってごらん？」

「くりちんぽ♡くりちんぽ、いいっ！」

「わぁ、下品だねえ……♡」

意味を理解せずに甘く叫べば、芯がぐりゅっ♡と指先で潰された。

私は「お、おッ」と低く鳴いて、軽く達する。

でもまだ足りない。もっと強く、もっと深く、至りたい。

「そっかあ。これはクリちゃんじゃなくて、クリちんぽだったか♡」  
「う、んんっ♡ふああ、きもちい♡♡♡」

言えと言われたからその通りにしたら、更に言葉で詰られて。反抗したいのにクリちんぽが気持ち良すぎてそれどころではない。

スリスリ、クリクリ。

的確に皮からはみ出した部分を撫でる手管は相変わらず巧みだ。

重い絶頂を期待してヒクついている膣内がただただ歓喜していた。

「クリちんぽの亀頭、きもちーね♡こうして爪でカリカリくってしたら……」

「あ……ッ！あしゅごッ♡♡」

突然性感が強まって、私は目を白黒させながらもよろこんだ。

先っぽをカリカリされる度に勝手に腰が跳ねて、あっという間に絶頂への階段を駆け上っていく。

「ああ、ああっ♡これ、だめッ♡♡あ、あゝっ♡」

「……うんっ♡刺激が強すぎたね♡」

爪で搔かれる刺激に耐えきれず、即座に達しそうになった私が『だめ』と口走った瞬間——彼の指の動きが止まった。

「え……?……っ??」

「ごめんねー?ゆるしてね♡」

先端を搔いてくれていた爪が離れ、皮の上から人差し指の腹が当たられる。

そうしてまた、クリちんぽが、優しく撫でられ始めた。

「……っ?……??なん、でっ?」

「ふふ……♡」

さっきまであんなに、気持ちがよかったのに。

あのまま続けてくれていたら、絶対イッていたのに。

また焦らされて、もどかしい。こんなのじゃ全然足りない。

「うう、イきたい〜っ」

「あははっ♡でも、ダメだったんでしょ♡なら、これで我慢しようねえ♡♡」

包皮の上からのスリスリも、最初は確かに気持ちがよかったはずなのに——今となってはとにかく、もどかくて仕方がない。

もつとめちやくちゃにしてほしいのに、どこまでもその手付きは優しいのだ。

「ぱんっ、ぬぐっ♡」

「まだだーめ♡これで我慢だよー♡」

直接触ってほしいと主張したのに、スリスリナデナデと下着と、皮越しに淫芽が愛でられている。

違うの、直接グリグリして。そう望んでイヤイヤと首を横に振る



が、彼はにっこりと笑って首を傾げるだけだった。

「我慢♡がーまん♡ドスケベな勃起クリちんぽは、我慢しなきゃだーめ♡」

「うう、我慢やだあ！イきたいい……っ」

私は再び嫌だとかぶりを振るが、笑って黙殺された。

スリスリ、スリスリ。クリトリスは優しく指の腹で撫でられ続けている。

爪で搔いてももらえない。ただ緩慢で焦れたい刺激のみが、そこに注がれていた。

「イきたいー！クリちんぽ、イきたいのおっ」

「そっかあー♡じゃあ、頑張ってねえ♡」

どうしてもイきたいのなら、この弱い刺激でイけということなのだろう。

私は悔しさに歯を食い縛り、どうせ躲されると分かっているながらも腰を前に突き出した。

「——おッッ!？」

「ふふ……♡」

しかし何故だか彼の指は、そのまま留まっただけで。予想外にもクリちゃんぽは彼の指先でゴリユウ♡と押し潰されてしまった。

「おっ？っ？っ？お、……っ？？」

強烈な快感に襲われて。私はなんで、気持ちいいの？と、首を傾げた。

咄嗟に腰を引いてしまったので衝撃は一瞬だけだったが、まだクリがビリビリしている。

己が身に起きたことが信じられず——私は試しにもう一度、腰を突き出してみることにした。

「あひ……ッ!？」

またしてもクリちんぽがぐりゅうつ！と押し潰された。

気持ちいい——。ものすごく、気持ちがいい……！

引けた腰を再度持ち上げれば快感が脳天まで突き抜けて。私から正常な判断力を奪い去った。

「あッ、おっ！おっ！お、しゅごおっ♡♡♡」

「ふふ、すっごくエッチだぁ♡いいね、ドキドキしちゃう♡」

腰を前に突き出す度、クリトリスが苛烈に押し潰される。

圧迫されたまま腰を揺すればぐりゅうぐりゅうと擦れて、私は即座に達してしまった。

「あ、ひい……ッ♡♡おっ♡♡ぎぼちい♡♡♡」

「うんうん♡もーっとゴリゴリしてごらん♡もーっと気持ちよくなれるよお♡」

促された通りに何度も腰を突き出し、ガチガチに勃起したクリちんぽを恋人の指先で押し潰す。

すると本当にもっともっと気持ちよくなれて。私は連続で何度も、絶頂を重ねた。

「はっ、はっ！ あ、あー……っ♡」

何重にも襲いかかる絶頂のせいで、頭の中が真っ白だ。

私ははふはふと口から酸素を取り込みながら、どさりと寝台の上  
に腰を落とした。

クリちんぽが気持ちよすぎて、腰が抜けている。

ドツと押し寄せてくる快感とその余韻で、上手く体が動かない。  
ヒクつく蜜道は、大きな充足感を発していた。

「あれ、どうしたのかな？ ほら、もっとしなきゃでしょ？」

「……あ、ひッ!? や、あおおーッ!!」

不意に指先でゴリユツ♡とクリトリスを押し潰されて、そのままゴリユゴリユゴリユツ♡と摩擦される。

達した直後の体に強烈な快感を叩き込まれた私は啞然と目を見開き、口もポカンと開けて。やがて強制的に与えられた膨大な快感に自覚の無いまま達し、ビシヤツ！と潮を吹いた。

「アツ！あッ！あいぐッ！お、ほ、あ、おおぐッ！」

潰して擦られたと思えば、右手で摘まんて指の腹で撫でられる。

下着越しでもしつかりと芽を捉えた指先は、次第にシコ、シコ：

…♡と突起を扱き始めた。

絶頂も潮吹きも止まず、腰から下が無くなってしまうそうだ。

「コリコリ♡クリちんぽ、ガチガチだから扱き甲斐があるなあ♡」

「おおーッ！イッ、ぐうぐうッ！！イグッ！イッグ！」

イッてもイッても、クリちんぽへの刺激が止まない。

私はまるで本物のおちんぽにするように、皮を使って芯を上下に扱っていた。

「シコシコ♡ゴシゴシ♡クリちんぽ、お射精できるかな♡」

「おっおッ♡イツく♡♡くり、いくのおっ♡♡♡」

シコシコシコ♡と、小さな芽が苛烈に擦られている。

皮でにゅぐにゅぐと摩擦される芯が、ジンジンして熱い。

指が上がる度に先っぽが顔を出し、その度に下着の生地で擦れてたまらない。

望んでいたはずがいきすぎて。もうこれ以上は無理だと訴えかけたのに、私はいくことしか出来なかった。

「先っぽはどうなってるかな？えへ、こちよこちよしちやおー♡」

「ああ、あふうつ♡♡♡」

彼は右手でクリコキを継続しながら、左手の人差し指でクルクル

と先端を撫でる。

皮越しに執拗に嬲られている神経が、下着の越しとは言え直接的に弄られて。感じすぎている私は喉を反らしてビクビクと全身を痙攣させた。

「あ……ッ、あ、あ」

下から掬い上げるように人差し指を当てられたクリトリスは、絶えずにゆぐにゆぐと扱かれている。

だからコキ下ろされるタイミングで芽は、にゆぐうつ♡と押し潰されていた。

「イッくう♡♡♡くり、きも、ちい♡♡」

「うんっ♡よかったねえ♡いっぱいイッてね♡」

定期的に押し潰されるクリトリスは、シコシコなでなでが延々と繰り返される。

そんなに気持ちいいなら、ずーっとしてあげると薫は笑っていた。  
イツて、潮を吹いて、いきすぎて安心して。それでもクルクルシ  
コシコ止まらない。

「ハッ、あッ、おおおッ♡♡♡」

「これイイ？」

扱きながら爪で先端をカリカリ搔かれて、また達してしまった。

カリカリカリ♡と絶えずずっと芽の先端を引っ搔かれながら、  
私はガクガクと首を縦に振る。

「そっか♡じゃあ、続けるね♡」

「ふ、ぐうう♡♡お、おー……♡」

シコシコ♡カリカリ♡シコシコ♡

薫はどんな時だって、忍耐強い。

だからクリちゃんぽ扱きもクリ亀頭カリカリも長々と続けられる。



時計を見ると、行為が始まってからもう一時間経っていた。

それなのにまだ、私は下着を履いたままだ。

そろそろ次のステップに移ってほしい――

そう切に願った私は自分の気持ちに反して、グルンと眼球を上向け――派手に達した。

「クリちんぽシコシコたまんないねえ♡♡はーいイクイク♡もつと頑張ってえ♡」

「お、ほ、おお、お……ツツ♡♡♡」

私がどんなに潮を吹いて連続で達しても、刺激は止まない。

薫は興奮した様子で笑いながら、ひたすらそこを責め続けていた。触れられていない蜜口は、もう既にぐちゃぐちゃだ。

お尻までドロドロに濡れて気持ち悪いくらいなのに、完全に無視されている。

「よしそろそろお、皮をムキムキするよお♡」

「あ……っ！あ、あん……っ♡♡」

愛液を吸って重たくなっている下着の中に、薫は左手を滑り込ませた。あまりの濡れ具合に驚いたのか、「わあっ♡」なんて言っているがすぐにクリトリスを捉える。

「こうしてクイツと皮膚を引っ張って……♡」

「あっ、ヒツ♡お、あおお……♡」

彼の指先が、クリトリスの上の皮膚を引っ張った。

するんと剥けて、顔を出したのは念入りに刺激されてビキビキに怒張している淫芽だ。

薄い布地越しにゆっくりと人差し指の腹で圧迫され、そのままくるくると撫でられ始める。

「ひ……ッ!!♡♡しゅごっ♡♡これ……っ！」

「うんうん♡ズル剥けのクリちゃん、きもちいいねえ♡」

二本に増えた指の腹で、しつこくなでなでくるくる。

下着の生地が濡れそぼっているせいで、滑りよく彼の指が動く。

「お、お、んおお……っ♡♡♡」

「ふふ、パンツ越しでもクリちゃん、熱くなってるのが分かるよ♡」  
激しくも強くもない刺激を与えられている。それだけなのに――  
私の下腹部には着実に熱が蓄積していった。

――いいやそれどころか、既に甘く達している。

「クリちゃん爪でこちよこちよ♡カリカリッ♡」

「ひゃあッ！あッ、ああ……っ！」

不意に鋭い刺激が走って、ビクンツと大きく体が跳ねた。

一足飛びで頂きに到達しようとしたところで、またよしと優しく撫でられる。

「んん、んッ、んー……」

先ほどまでの激しい責め苦から一転、また薫は焦らしモードに入ってしまった。

強い刺激を感じた後だから、どこか物足りない。

でももう私は既に、数えきれないほど達してしまっている。

クリもおまんこもムズムズとしてしまいうけれど、私はこれ幸いと呼吸を落ち着けることにした。

「気持ちいよおって、クリちゃんビクビクしてるね♡ふふ、やっぱ  
りおちゃんぽみたい♡」

「うう……っ」

恥ずかしい。どうしてそんなことを言うのだろう。

私が不服に感じて唇を尖らせると、薫は何故だかニパツと笑った。  
「かゝわいい♡拗ねないでえ？ ほら、クリちゃんタシタシしてあ

げるから機嫌直してえ♡」

「……おッ！ハッ、あッ♡ああっ！」

優しく撫でられていた芽が、今度は指の腹でトントンとタツピングされている。リズム良く叩かれる度に痺れるような快感が走り、勝手に足がビクビクと跳ねた。

「やっ、あッ♡♡ふあ、あんっ♡だめっ♡きもちいっ♡♡」

「それはよかった♡いっぱい叩いてあげるから、好きなタイミングでイッてね♡♡」

タシタシ♡トントン♡タシタシ♡

下着の上から執拗に叩かれるクリトリスが、気持ちいい。

扱きかれる刺激や搔かれる刺激のとも違って、安心して浸れる心地好さだ。

お腹の奥が切なくきゆうつとして、膣内が激しく蠕動する。

「イきそう……！アッ、ああ、イツく……！」

「いいよお♡イツて？」

トントン♡トントン♡皮を剥かれたままのクリトリスは尚も、一定のリズムで叩かれている。

私の腰が揺れてもしっかりと狙いを定めた指が振り下ろされるため、快感は止まない。

「お、お、いっ、ぐう……！お……♡♡♡」

「あはっ♡じょーず……♡♡」

腰を反らして足の指を丸めて。そうして派手に達した私は、ビリするクリトリスを尚も叩かれ続ける。

タシタシタシツ♡達したばかりで感度の上がつている芽が押し潰されて、形を変えていた。

「よーしよし♡甘イきもお、ガチイきもお♡どっちも沢山、しよ

うねえ♡はーい頑張ってー♡♡」

「ほ、おお……♡お……♡」

剥いたクリトリスを下着の上から叩かれているだけなのに、痺れるほどに気持ちがいい。

トントン♡トントン♡絶頂の余韻が残るクリトリスが、尚もいじめられている。

「いーけ♡いーけ♡ほら、イクイクして？イクイクはやくう♡」

「あ、ひっ♡おいッぐ♡♡イぎましゅっ♡♡♡」

急かすように、タシタシタシ♡と素早くクリを叩かれて。私はまた、達してしまった。

「お、おおお……♡♡♡」

しかしそれでも、高速タツピングは終わらない。

潮を吹いてもお構い無しで、無慈悲にも指を振り下ろされる。

「まだ、イけるよね？ ほーらいーけ♡もつとイけ♡♡……あはっ♡またイツたあ♡♡」

「お、お、お、お、お」

トントン、トントン♡何度イツても、いーけ♡と命令されながら、私はクリトリスを叩かれる。

過ぎた快楽に呆然と口を開け放ち、白目を剥いても。いーけ♡の命令は止まらない。

「あと三回ねっ♡いーけ♡いーけ♡頑張ってー♡」

「――、……ツツ、あッ♡♡」

何度も何度も細かく連続で達しているのに。どうやらそれは、『一回』の絶頂としかカウントされていないみたいだ。

めっちゃくちゃ酷いイき方をしてガタガタと体を震わせる私は、

『あと二回ね♡』と死刑宣告を受けた。



「……あれえー？一回目が長引いてるみたいだねえ♡それが終わらないと、二回目にいけないよー？」

「ハッ、あ、あぎゅ、おほ」

ひたすらクリトリスを叩かれながら、終わらない絶頂に堕ちる。無理だと力なくかぶりを振っても、笑って首を傾げられた。

やると言ったら、実現する。

温厚だが頑固なところもある薫だ。妥協はしないだろう。

そう、察して。

それから三十分をかけて漸く、彼の言う『三回』を達成した私は——  
今では息も絶え絶えになっていた。

「じゃあ今度は直接叩くね♡」

「は、え……？」

それなのにおかしな宣言をされて。

ぽかんとしている間に、下着を左に引っ張られる。

それから私が状況を理解できずに呆然としていると、私の両目が勝手に、ぐるんつと上向いた。

「いーけ♡頑張れっ♡あと三回っ♡」

「あうう……、おひ、おお……」

クリトリスが指で、タシタシ叩かれている。

しかも下着の生地を引っ張る手で器用にもまた、皮を剥かれているので——芯が直接、だ。

「あっ、今度は撫でてもあるねえ♡」

「ひぐっ♡♡♡あ、あ、あへえ……っ♡♡♡」

剥き出しの芯がスルスル、クルクルと指の腹で撫でられている。

愛液でびしょびしょに濡れているため、擦る指の動きはスムーズだ。

「トントン♡クルクル♡よしよし♡まだイけるよぉ♡」

「ハッ、あ、はあっ、お、おッ♡♡♡」

捲れた下着の隙間からビシャッ♡と潮を吹いて、私は達した。

それを褒めるようにくるくる♡と淫芯を集中的に撫でられて、腰が碎ける。

「ふふ、全身まっかかで、くたあってしちゃってる♡可愛いなあ♡もっとうご奉仕したくなっちゃう♡」

「あひ……っ♡お、おおー……♡」

今度は指先で芽を摘まんで、もみもみ♡コリコリ♡と刺激されている。

イきすぎてもう、わけが分からない。

膣内が絶えずキュンキュンドクドクとしていて、脳内は真っ白。

彼としてはあと二回イッてほしいのだろうけれど、私はさっきの

一回が重すぎて戻ってこれていない。  
要するに、まだイツたままなのだ。

「うーん……？」

「あゝあゝあゝあゝ♡あゝ……♡♡♡」

剥けたクリトリスを摘まんて揉みくちやにされながら、私は呆然と大きすぎる快楽に浸っていた。

ずっと気持ちいい。イツた感覚から抜け出せない。

いいやそれどころか、刺激が止まないせいでいくのが止まらない。気持ちいい。グチャグチャのドロドロに、壊されてしまいそうだ。

「……あー、流石にいきすぎちゃった？ちよっと休憩しようか。ねっ？」

「おおー……♡はふっ♡おっ♡はっ、おほ……っ」

まるで幼子に言い聞かせるように語りかけられて。クリトリスが

しつこい責め苦から解放された。

湿りに湿って気持ち悪い下着を、丁寧に履き直させられる。

不意にマットレスが右に傾いた。かと思えば、右頬に口付けられる。けれど私は目の前も頭の中もグルグルしていて、それどころではなかった。

「お水、飲もうね。お口あけてー？」

「んむッ、んッ！……ケホッ、ゴホッ」

口に柔らかな感触が触れて、口内に生暖かい液体が注がれた。

しかし息をするのでやっとな私は飲み込むのに失敗して、噎せてしまう。

「わあ、ごめんっ！ごめんね」

「うう……」

肩や腕を優しく擦られて。私は衝動的に目の前の体に抱き着いた。